

# 保育者養成課程におけるコードネームによる弾き歌いの学習 —保育の視点からの考察—

Learning of singing to one's own piano accompaniment that uses  
chord symbols in the early childhood education courses  
—Consideration from the view point of child-care—

児童学科非常勤講師

小田切 舞美 篠崎 智 山本 優子 山下 彰子

## 1. はじめに

筆者らが担当している授業「音楽I」「幼児音楽A」では、グループレッスンで、コードネームを使ったピアノの弾き歌いを指導している。弾き歌いの学習を通して、演奏技術や知識を身につけ、保育現場で音楽表現活動を展開、実践させる力をつけることが目標である。

使用テキスト『かんたんメソッド コードで弾き歌い』では、楽譜は大譜表ではなく、歌のメロディにコードネームが書かれた一段譜を用いている。右手でメロディを弾き、左手はアレンジをして伴奏する。まずはコードの根音による単音伴奏から始めることで、ピアノ初心者でもすぐに弾き歌いができ、経験者もバランスの良い弾き歌いが可能になる。1年間でレパートリーを増やしながら、発展したコードやアレンジを学び、表情豊かな弾き歌いを目指していく。

授業では弾き歌いの技術を身に付けることが主な目的になっており、その技術が保育現場でどのように活かせるのか、という視点が不足しているように思える。保育の視点を持って弾き歌いの学習を進めていくことは、より実践的で、保育者を目指す学生たちのモチベーションを高めることができると考える。そこで本稿では、保育現場の考察を通して、授業内容と保育活動を関連づけていく。

## 2. 保育現場の考察

### (1) 保育現場における「表現」

保育現場では『幼稚園教育要領』と『保育所保育指針』を基に保育が展開されているが、要領や指針の中では音楽活動の事を「表現」と位置付けている。「音楽」と定義されないのは、保育現場では音楽的な活動のみが独立して行われているのではなく、日々の遊びと音楽がつながりを持って展開されることが望ましいとされているからである。

『保育所保育指針』には「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と記されている。また、この中で音楽に関する記述は「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう」となっている。

『幼稚園教育要領』には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10項目が挙げられているが、その中の一つ「豊かな感性と表現」では「様々な表現を楽しみ、自ら表現する意欲を発揮させることを目指す」と記述されている。

### (2) 表現活動の実際

以下、筆者(山本)が運営する『はあもにい保育園』の表現活動の様子に基づき、年齢別に子どもの発達状況と活動内容をまとめたものを紹介する。

### 【0歳児クラス】

自分で座れるようになると音楽に合わせて身体を揺らす姿が見られ、保育者が歌うと声のする方向に振り向いたりする。つかまり立ちや歩行ができるようになると、身体を横や縦に揺らすようになる。とりわけ歩行ができるようになると、膝を使い、音楽に合わせてビートを刻む姿が見られる。太鼓のような手で叩くと音が出る楽器や、マラカスや鈴のような振ると音が出る楽器に興味を持ち、自分から触り、音を出してみようとする。月齢が高くなると言葉が出てくるようになるので、簡単な歌の歌詞の末尾だけをまねて発語しようとする。

### 【1歳児クラス】

保育者が行う手遊びを見様見真似でしようとする。音楽に合わせて動作をする事が可能になる。音楽が流れている時と、流れていない時の違いに自分から気が付くことができる。ピアノを弾いている間はマラカスなどを振るが、ピアノを止めると音楽が中断されていることに気が付き、振るのを止める。歌は言葉が出ていない時は歌詞の末尾だけを歌おうとするが、言葉の発達が進むにつれて歌える箇所が増えてくる。歌唱や身体を使つての表現は、保育者からの言葉がけで内容を理解できる部分はあるが、視覚的な刺激が優位なため、言葉で伝えるだけでなく、視覚教材を併用すると効果的である。

### 【2歳児クラス】

保育者と会話のキャッチボールができるようになり、より応答的な音楽活動が可能になってくる。簡単な交互唱で保育者と歌の掛け合いのようなことも行うことができる。また、言語をより自分なりのイメージで理解することができるようになるため、音楽の中で簡単なセリフを言おうとする。動物や架空の人物など、何かになりきって表現するという事もできるようになってくる。少しずつ他児とタイミングを合わせる、といったこともできるようになるため、手合わせ遊びや、楽器を持って他児と同じタイミングで音を鳴らすなどの活動が可能になってくる。また、音楽に対するイメージや「もっとこうしたい」という欲求を言葉にして伝えることができるようになる。

### 【3歳児クラス】

言葉が発達してくると同時に、歌唱も簡単な歌であれば、ある程度音程をつけて歌うことができるようになってくる。簡単な動作をしながら歌ったりすることもできる。曲想の違いやテンポの違いなどを聴き分ける力もよりついてくるため、それらを身体で表現することができるようになってくる。更にジャンプや、手に何かを持って動くという、身体的な発達によりできることも増えるため、活動の幅が広がってくる。他者と協調して動くというようなことができるようになるため、音楽に合わせて他児と一緒に表現する活動を楽しんで行うことができる。また、様々な楽器が持つ音色の違いを聴き分けることができるようになってくる。

### 【4歳児クラス】

歌唱の中で、より歌詞の意味を理解して歌おうとする力がついてくる。歌詞の意味や背景など、口頭での説明でも理解ができるようになってくる。手先が発達してくるため、マレットを使った鍵盤楽器など、より手先のコントロールが必要な楽器などでも少しずつ演奏ができるようになってくる。また、自分たちが歌っている声や、出している音がきれいだったか、そうでなかったかなど、客観的に自分たちの演奏を捉えることがよりできるようになる。簡単なアンサンブルであれば他児と合わせることをしようとする。

### 【5歳児クラス】

歌唱では、自分なりに歌詞の意味を捉えられるようになり、保育者に説明されなくてもイメージを持って歌ったり、意味がわかって歌っている子どもも多い。歌詞を置換えたり、替え歌を作るなどの姿が見受けられるようになる。音楽の持つイメージから、自分たちなりの身体表現をすることができ、他児と話し合っただダンスを創造することもできる。理解力や身体発達に伴い、ハンドベルやトーンチャイムのような音程のある楽器を周りと共調して演奏しようとする意欲が高まってくる。

### (3) 保育者に求められる力

『幼稚園教育要領』や『保育所保育指針』にあるように、保育現場では子どもたちが自分なりに表現することや、創造性を大切にすることが求められている。これは単に保育者のピアノ伴奏に合わせて歌を歌うような単純なものではない。表現活動は音楽活動に身体活動を伴ったり、他児と関わり合いながら、遊びを通して行われる。保育者は子どもたちが自分なりの感性で捉えた音楽表現、身体表現を展開していきえるように援助する必要がある。また、乳幼児期の発達状況は月齢や年齢によって大きく変化するため、保育者はよく観察した上で、それに応じた活動を展開する力が必要とされている。

例えば、乳児は音楽を聞いて身体を動かすことができるが、曲のテンポに合わせて動くことは難しい。乳児は固有のビート感を持っており、保育者はそれに合わせて演奏する必要がある。

また、乳幼児の歌唱は声量もなく発語が未発達なため、シンプルな伴奏の方が子どもは歌いやすく感じる。保育者は子どもの発達状況や習熟度に合わせて、伴奏の音の数を増やしていくことが望ましい。

このように多岐にわたる表現活動に対応するためには、どの場面でどのような演奏をするのか、保育者が選べるようになる必要がある。そこで、本授業の中でコードネームを使ってアレンジを学ぶことはとても役立つであろう。演奏技術の習得とともに、音楽の要素や構造を知り、それらの特徴を感じ取りながら、学生自身が応用できる力をつけさせる指導が求められているといえる。また、グループレッスンを活かして、学生が保育者役と子ども役を分担し、子どもの様子を見ながら演奏するなどの力も育むことができるだろう。

### 3. 授業内容と保育活動の関連

本授業で弾き歌いの学習をすることにより、保育現場でどのように活用できるのか、その二つを関連付けていく。

テキストでは「練習の手順」として、以下の順で弾き歌いを進めていく。

- ①歌詞を読む
- ②メロディのリズムを打つ
- ③歌詞をつけて歌う
- ④右手でメロディを弾きながら歌う
- ⑤左手でコードを弾く（コードをアレンジする）
- ⑥メロディを歌いながら左手でコードを弾く
- ⑦両手で弾き歌いする

この7つの行程は弾き歌いをするための学習ステップであるが、保育現場においては子どもの発達状況や活動内容に応じて、各ステップがそのまま保育活動として活用できるものであると考えられる。

以下、ステップごとに【授業内容】と【保育活動】に分け、それぞれの内容や留意点を述べていく。

#### ①歌詞を読む

##### 【授業内容】

歌詞の中でどのような気持ちや事柄が語られているのか、よく読んで解釈し、明確にイメージをすることが大切である。当然、知らない言葉は調べて理解する必要がある。作詞者や作曲者についてなど、その曲が作られた背景を知ることがイメージを膨らませるのに一役買うことになるだろう。イメージの持ち方は人それぞれ異なるので、どのようなイメージを持っているのか、学生同士で話し合うと良い。それによって更に豊かなイメージが作られていく。

また、黙読だけではなく、朗読することが大切である。歌詞には七五調で書かれたものや、オノマトペ（擬音語・擬態語）、韻を踏んだものも多く、言葉の持つリズムや抑揚を感じながら朗読したい。日本語に

は高低アクセントがあり、それをはっきり付けて読むことで言葉の抑揚を感じることができる。アクセントや強調したい言葉はやや大げさに表現した方が良いでしょう。メロディは言葉のリズムや抑揚に則して作曲されていることが多いため、それらを意識して読むことは抑揚のある歌唱にも繋がる。

発展した活動として、歌詞を基に振り付けを考えたり、替え歌を作ったり、歌詞の続きを作るといった活動も学生の感性を豊かにすると考える。

#### 【保育活動】

子どもたちは歌詞を読むことによって、歌詞の意味をより具体的にイメージでき、今まで知らなかった言葉を習得する機会にもなる。このように「言葉」にフォーカスして援助を進めることも大切である。場合によってはパネルシアター、ペープサート等の視覚教材の利用も有効である。また、音読をする際には、言葉の持つリズムや文章のまとまりを感じられるように援助する。周囲の子どもたちと「呼吸を合わせる」という意識を育むためにも、メロディや伴奏がない状態での音読を経験することは有効なプロセスになるだろう。

### ②メロディのリズムを打つ

#### 【授業内容】

テキストに載っている曲は聞き馴染みのあるものが多く、学生は聞き覚えた感覚で演奏することも多い。そのため、楽譜を見ながらリズム打ちをすることで読譜力を高めることができる。

リズムを打つ際は、まず拍をカウントしてテンポを安定させてから、自然に拍にのる感覚でリズムを打つ。単に音符の長短を正しく打つだけではなく、フレーズ感を持ち、どこにアクセントをつけるのかを意識して打ちたい。これはのちに右手でメロディを弾く際にも役立つ。

#### 【保育活動】

子どもたちのリズム習得は読譜によるのではなく、言葉のリズムと結びつけて覚えていく方法が効果的である。「パターン」などの擬音や「パイナップル」などの固有名詞、「トラック ゴーゴー」などの短い文章のリズムを声に出しながら手拍子で打つなどして、言葉の持つリズムを感じながら楽しむような活動が望ましい。

### ③歌詞をつけて歌う

#### 【授業内容】

歌うことに苦手意識や抵抗を感じている学生は多い。まずは人前で声を出すことに慣れるため、グループ全員で発声練習をすると良い。腹式呼吸の導入として次のような活動がある。腕をのばし、一本指を口ウソクに見立て、ひと吹きで火を消すつもりで息を吹きかける。徐々に口ウソクの数、つまり指の数を増やしていくと長い息になる。学生同士が互いの指を吹き合ってみるのも場が和んで良いでしょう。

歌いづらさを感じる時には、言葉を母音と子音に分けると良い。まずは母音唱を行い、伸びやかに息を流す感覚をつかみたい。子音は主に舌や唇を使って発音するが、どの部分を使って発音しているか意識すると良い。力まず丁寧に発音し、スムーズに母音へ繋げたい。

姿勢や口の開け方、声を響かせる場所、舌や唇の使い方、顔の表情などによって、息の流れや声の明るさ、発語の明瞭さなどが変化する。身体と声の結びつきを意識することはスムーズに歌うための手がかりとなるだろう。

歌詞やメロディのまとまりを考えてプレスの場所を決めることも大切である。次のフレーズをどのような表情で歌いたいのか考えて、文字通り「呼吸を変える」ことで表情の変化をつけることができる。聴き手に歌詞のイメージを伝える意識を持って、メリハリをつけて歌いたい。

**【保育活動】**

子どもたちが歌詞を覚える際、特に乳児は保育者の口元を観て、言葉の意味はわからなくても口の動きを真似て覚えようとする。そのため、保育者の明瞭な発語が求められる。対面で顔が良く観える環境設定での活動が望ましいので、ピアノは弾かず、アカペラでの指導が効果的である。はっきりとした口の動き、正確な音程、子どもに合わせたゆっくりめのテンポを心がけて歌唱することが大切である。

**④右手でメロディを弾きながら歌う****【授業内容】**

右手でメロディを弾くことにより、歌をガイドし、音程が定まりやすくなる。その反面、たどたどしく弾くと歌もつられてしまうため、正確に流れるように弾きたい。フレーズがきれいに繋がるような指づかいを考えることが大切である。歌のブレスを待たずに先へ先へと流れるピアノ先行の演奏も多いので、歌と共にブレスをするつもりで弾きたい。

**【保育活動】**

子どもたちが曲の導入初段階であった場合、保育者は伴奏をつけずメロディだけを弾き、子どもたちと音程や歌詞を確認する機会を持つことも有効である。メロディを弾くことは、歌唱が不安定な段階でガイドになる。その際、保育者自身がフレーズやブレスの位置を意識し、子どもたちに伝わるように弾き歌いできることが望ましい。

**⑤左手でコードを弾く（コードをアレンジする）****【授業内容】**

左手はコードネームを基にアレンジして伴奏をする。この部分がテキストの大きな特徴であるため、導入部の「単音伴奏」と次段階の「基本型伴奏」にわけて述べる。

**1) 単音伴奏**

コードの根音を単音で弾く「単音伴奏」からはじめる。楽譜には弾くべき根音の音名は指定されているが、どの高さで弾くかは指定されていない。そのため、Cのコードの場合、左手で「一点ハ」「ハ」「は」のどの音で弾くのかを選ばなくてはいけない。この時、指導者は学生に対して、響きに耳を傾けて、音域の違いによる効果を感じ取るよう促すことも大切である。また、曲中でコードが変化する際も、音を上行させるか下行させるかはテキストでは示されていない。そのため、コードがCからGへ進行する時、「ハ」から「ト」と上行するのか、「ハ」から「と」と下行させるのかを学生は考えなくてはならない。また、伴奏部分のリズムも特に指定がないため、全音符や2分音符など音をのばして伴奏するのか、4分音符や8分音符などを中心とした拍を刻むような伴奏にするのかも学生は考えなくてはならない。

もちろん、初期の段階では指導者がそれらのことを指定して進めていくことになるが、基本的には学生が自分で考えることが大切である。そのためには楽曲全体の雰囲気や、右手の重なり、指づかいなど技術的な要素を考慮する必要がある。

単音伴奏であってもリズムを工夫することで雰囲気を変えることができる。付点音符やシンコペーションなども取り入れて、リズムパターンを増やしておくことはアレンジの幅を広げることになる。

このように、初期の段階から学生は「弾くべき音を考え選ぶ」作業が必要になる。この点が大譜表を用いて、楽譜に書かれた全ての音を弾いていく一般的な学習との大きな違いである。

また、単音伴奏で「メロディとベース」という骨組みを学ぶことで、大譜表に書かれた難曲をシンプルな伴奏にアレンジすることにも繋がるだろう。このように、音を考え選ぶ作業を早い段階から始めることで、臨機応変な演奏への発展も期待できる。

## 2) 基本型伴奏

基本型でコードの構成音を覚えたあと、構成音を様々に組み合わせた伴奏パターンを覚えていく。テキストでは7つのパターンが示されている。それらはオスティナートのパターンであるため、楽曲を弾き歌いするためには、パターンを機械的に当てはめただけでは不十分である。

曲の終止部分はオスティナートのパターンでは終始感がないため、メロディに合わせて伸ばす、短く切る、などのアレンジが求められる。

また、アレンジを考える際には、フレーズとフレーズの間合いの手のような短い楽句（フィル）を挿入する、一時的に伴奏部分を無くす、あるいはリズムを刻まず和音で伸ばす（ブレイク）、メロディと同じ音やリズムを弾く（ユニゾン）、楽曲の進行に合わせて伴奏パターンを変える、などの手法も取り入れ体験していきたい。

グループレッスンでは自分以外のアレンジを聞くことができるので、良いアレンジがあれば互いに試してみると良いだろう。学生は聞いただけでは真似ができないため、指導者がリズムや音の選び方などを解説する必要がある。

伴奏アレンジは音の数が多いため表情豊かな演奏になる訳ではない。素朴な曲にはシンプルなアレンジが合うであろう。また、複雑な伴奏アレンジは必然的に難易度が上がってしまう。そのため、メロディや歌詞のイメージに合ったものを、適切なテンポで、余裕を持って弾き歌いできることが大切である。指導者は学生の技量に無理のない範囲で、最大限効果的なアレンジができるよう導いていきたい。

アレンジの工夫ができるのは、音楽経験の豊富な学生に多くみられる。経験の幅を広げるために、創作活動を取り入れるのも良いだろう。例えば、メロディの1フレーズを取り出して、合唱できるように新しい声部の音を作る。また、前奏、間奏、後奏としてオリジナルのメロディを作る。いずれも曲中のコードを基に、構成音を組み合わせることで作っていくと良い。さらに、一つの曲を異なるイメージにアレンジする活動もおもしろい。例えば、楽し気、悲し気、子守唄風、オパケ風、ヒーロー風、沖縄風などのテーマを決めて、音域やリズム、テンポ、強弱、音階、調などを工夫しながらアレンジする。聞いている学生にはテーマを伏せておき、イメージを当ててもらえば、表情豊かな演奏にも繋がるだろう。

### 【保育活動】

コード伴奏をすることにより、子どもたちの声量や曲の習熟度に合わせて伴奏を変化させることができる。声量の少ない乳児には、音数の多い伴奏よりも、単音伴奏のようにシンプルな方が歌唱が際立つ場合もある。また、幼児になると声量も増し、徐々に音程も安定してくるため、段階的に音数を増やし伴奏に厚みを持たせることで歌唱とのバランスが取れる場合もある。また子どもたちを見ながら伴奏をするために、シンプルな伴奏にすることで、様子を見る余裕をもつことができる。

1つの曲を様々なアレンジで伴奏できると、その曲の表現の幅が広がるため、子どもたちの歌や活動にも広がりを持たせることができる。同じ曲でも、ゆっくりと声を引き立つようなシンプルな伴奏から、アップテンポで刻みの多い伴奏など、アレンジにより様々な活動ができる。

また、子どもたちの身体表現や発想を活かしたリトミックのような活動では、ビート、テンポ、リズム、曲想に変化をもたらすことで、子どもの様々な表現を引き出すことが可能になる。

## ⑥メロディを歌いながら左手でコードを弾く

### 【授業内容】

右手にとらわれずに歌えるため、歌が主体となって弾き歌いができる。左手の音を聴きながらハーモニーを感じ、その上にメロディを乗せる感覚で歌いたい。声だけで音程を保たなければならないため、より確実に安定した歌唱力が求められる。

**【保育活動】**

保育者が「メロディは歌えるが伴奏ができない」という場合、両手で弾こうとするよりも左手の伴奏のみにすることで、簡単に音楽としての形づくりをするのに役立つと思われる。実際のところ、保育者は練習をする時間を確保するのが難しいため、ほぼ初見に近い状態で演奏しなければならなくなった場合に有効な方法だと思われる。

## ⑦両手で弾き歌いをする

**【授業内容】**

歌がよく聞こえるように、歌とピアノのバランスは7：3を意識したい。両手で弾き歌いをすることは技術的に難しいが、歌詞や曲のイメージを失わず、余裕を持って演奏できるようにしたい。

1人で弾き歌いをするだけでなく、伴奏する学生のピアノに合わせて、全員で歌うのも良い。一緒に歌うことによって伴奏が止まると歌いづらいことが体感でき、止まらないで弾くことの大切さを学べる。

また、学生同士で保育者役と子ども役を分担し、保育活動を疑似体験するのも効果的だろう。子どもの発達段階や活動内容を設定し、保育者役は子ども役の様子を見ながら演奏する。その場でステップ④～⑥のどの伴奏が適しているのか臨機応変に対応できる力をつけることができるだろう。

**【保育活動】**

新しい曲の範唱や、子どもたちの歌唱と共に両手で弾き歌いをする。子どもと演奏をする際、保育者は常に両手で弾き歌いをするのではなく、子どもたちの発達状況や習熟度を観ながら、ステップ①～⑥の内容を段階的に指導していくことが望ましい。

子どもたちが曲の習得初段階であった場合、保育者の声量がないと子どもたちのガイドにならないため、伴奏とのバランスを考慮する必要がある。耳を使いながら子どもたちの歌唱に合わせた弾き歌いにする必要もあるだろう。

**4. おわりに**

保育現場の表現活動は多岐にわたり、保育者が弾き歌いをするのは全体の活動のほんの一部である。しかし、コードネームによる弾き歌いの学習内容は、保育現場において汎用性が高く有益であることがわかった。

テキストではこの他に、メロディにスリーコードを付けたり、指定されているコードを変化させたりする発展的内容の学習も行う。これらを体験することで、演奏困難な楽譜や和音が複雑すぎると感じる曲に出会った時、より単純な形にアレンジする力にも繋げられる。

本授業を保育の視点を持って行うことは、保育者をめざす学生たちのモチベーションを高められるであろう。保育現場での具体的なシチュエーションを提示することで、学生は学習の意味を理解し、より柔軟で表情豊かな演奏に繋がると考える。

また、グループレッスンを活かし、学生同士が学び合う環境にすることで、より高い学習効果が生まれられると思われる。学生のアイデアや発言を引き出し、学生一人ひとりの感性を伸ばしていけるようなアプローチを心がけたい。

1年間の授業を終えたあとも、学生が自分で工夫し進歩していけるような基礎力を本授業でつけることが大切だと考える。

**参考文献**

- ・飯村孝夫(2015)『ことばが届く歌い手になる』太郎次郎社エディタス

- ・ ヴォーダマン, キャロル (2016) 『親子で学ぶ音楽図鑑：基礎からわかるヴィジュアルガイド』(山崎正浩訳) 創元社
- ・ 音楽教育研究会編 (1999) 『幼児教育・保育者養成のための幼児の音楽教育 音楽的表現の指導』 音楽教育研究協会
- ・ 厚生労働省 (2017) 『保育所保育指針〈平成29年告示〉』 フレーベル館
- ・ 汐見稔幸 (2017) 『やさしく読み解く 保育所保育指針ハンドブック』 Gakken 保育Books
- ・ 鈴木順子・坂田すみれ・清水千恵・佐伯美和 (2017) 「ピアノ初心者のための弾き歌いに有効なトレーニングの一考察」『東京家政大学 教員養成教育推進室年報』 4,p. 91-100 東京家政大学教員養成教育推進室
- ・ 古川和代・森智香子 (2017) 「保育者養成校における学生の歌唱力を伸ばす指導方法－歌唱表現授業での気づきから－」『東京家政大学 教員養成教育推進室年報』 4,p.119-128. 東京家政大学教員養成教育推進室
- ・ 細田淳子・笹井邦彦・西海聡子・悠木昭宏・小田切舞美 (2017) 『かんたんメソッド コードで弾き歌い〈改訂版〉』 カワイ出版
- ・ 幼児表現教育研究会編著 (1989) 『幼児のための表現指導 うたって、つくって、あそぼう』 音楽之友社